

4. 何故「遊び」が必要なのか、必要な「遊び」とは何か

こどもたちは遊びを通して多くのことを育むと言われ、こどもたちが抱えている問題に対して「遊び」には大きな期待がかかっている。けれども、こどもたちの「遊びの出発点」は「おもしろそう、やってみたいな」であり、「あー楽しかった、またやりたいな、よーしもう一度」である。この気持ちが彼らの「遊び」に対する全てであり、何ものにも代え難い宝物、まさに生きるエネルギー、生きる力の源である。大人が期待するものは、こどもの将来にとって必要不可欠ではあるが、かれらにとってはたまたまの産物にしかすぎない。私は「こどもの遊びをこどもの世界に帰してあげたい！」と願っている。こどもたちの遊びがこどもたちの世界に帰ることで、少しずつかもしれないが、何か、いろいろなことが健康的に変わっていくのではないかと考えている。

地域福祉の推進に福祉現場としてどのように取り組むか

兵庫県社会福祉協議会総務企画部主任 村田 明子

福祉専門職は、常に人を支援することの難しさに日々直面している。地域における他機関・多職種との連携や支援困難事例だけでなく、利用者・家族からの苦情やトラブルにも対応しなければならない現状もある。また、社会的に援護を要する人たちに対する生活圏域を基盤とした援助のあり方や、終末期への支えのあり方など、今後、ますます重要になってきている。本人の真のニーズは何か、最後までその人らしく生きることを支えるということがどういうことなのか、地域福祉の推進に取り組む福祉現場の現状から問題点や課題について、次の4つの観点から報告したい。

1. 社会福祉・地域福祉の現場を大きく変えた介護保険制度
2. 福祉専門職の実態とは
3. 問われる権利擁護の視点と地域で暮らすということ
4. 求められる協働・多様なネットワークの構築の必要性

さらに増加する余暇(自由時間)

武庫川女子大学文学部教授 吉田 圭一

レクリエーションの価値やレジャー(余暇)の機能への期待とともに、それらを可能にする「量」としての余暇(自由時間)に関心を持つことも重要であると思う。21世紀を迎えて、余暇の量は増加するのか、減少するのか。

1 労働時間短縮と余暇

わが国、平成17年(2005)の年間総実労働時間は1,834時間であった。戦後最も多かった昭和